

評価項目	今年度重点目標	具体的取組	評価の観点	自己評価 [A～E]	評価の内容と今後の改善策
授業運営 学力向上	●オールイングリッシュでの英語授業を実施する中、「苦手意識」「英語嫌い」を発生させない。	●短いスパンで定期的に英語能力の測定を行い、気になる児童に対してフォローアップ体制をとる。 ●文書や保護者会を通し、家庭でのフォローの仕方を保護者にレクチャーする	●英語に苦手意識を持ったり、英語の授業が嫌いだと訴えたりする児童がいないか。 ●保護者から、子供の英語について不安を訴える声が上がってこないか。	B	●自由記述による保護者アンケートでは、英語の授業、教育に対する評価は非常に高いことがわかる。 ●一方、宿題の提示の仕方など、様々なトライをする中で、保護者から質問や心配の声が担任サイドに上がることも数件発生した。 ●スモールステップのテスト・評価を繰り返し、最適なレベルや方法論を探る努力を続けていく。
人間力の 育成	●あいさつをする習慣を身につけさせる。	●集団生活におけるあいさつの大切さについて折に触れて話す ●「教師からあいさつをする」指導から「目を合わせ、児童からあいさつをするのを待つ」指導へと徐々にシフトしていく	●児童が「すぐに」「自分から」「大きな声で」あいさつするようになったか。	C	●登下校時、定位置・定型の挨拶はできるものの、機に応じた挨拶をできる児童はあまりいない。 ●「すぐに」「自分から」「大きな声で」挨拶をする習慣が身につけている児童は1～2名。 ●全教師が常に意識し続け、タイミングを逃さずに児童に指導していく。
行事運営	●計画したすべての学校行事について、企画→準備→実施→評価の一連の流れを実現する。	●各行事の担当者を定め、担当者が中心となって一連の流れを運営しつつ、他の教師のフォロー、管理職によるチェック体制をとる。	●計画したすべての学校行事を予定通りに実施したか。 ●すべての行事について、企画→準備→実施→評価の一連の流れを実行したか。	D	●年度当初に予定していた学校行事のうち、「2学期保護者会」は他の日程との兼ね合いで見送りとなった。また、複数の行事について、実効性のある事後評価ができていないものがあった。 ●開校初年度の見通しの悪さが一因であった。次年度は今年度からの積み上げとなるため、確実性を上げることができると思われる。
保健管理 安全管理	●大けがをさせない。	●登校から帰りの会、アフタースクール、下校にいたるまで、すべての時間に教師・スタッフの目の届く範囲内に児童がいる体制をつくり、維持・改善していく。 ●危険な行動を未然に防ぐよう声をかける。	●骨折等、手術や入院を伴うようなけがをする児童がいなかったか。	A	●小さなけがは数件発生したものの、大きなけがにつながるような危険な行為・場面はなかった。 ●年度進行に伴って、教師一人当たりの児童数は次第に増える。教師がすべての場面に目を届かせる万全の体制をとることができなくなってくるため、児童への指導、上級生のリーダーシップの育成などを心がけていく。
組織運営 業務改善	●残業や休日出勤時数をできるだけ減らし、業務の効率性を高める。	●コスバの悪い校務の省略、効率的業務フローの構築を進めるとともに、勤怠管理システムによって各教員が残業時間数を意識し、短縮に努めるような体制をとる。	●全教員が労使協定に基づく時間外労働の時間数を一定程度下回ったか。	A	●時間外労働の年間合計は最大 720 時間。校長を除く教員 7 名の時間外労働は最長で 410 時間 31 分、最短で 204 時間 16 分、平均値は 323 時間 48 分であった。 ●今後の学年・児童数の増加を加味すれば、まだまだ改善の余地はある。各職員の業務効率に対する意識を高めるべく、データを示した指導を繰り返していく。